



同じ中学校に通う同級生、**戸山ミナちゃん**と**平山ジローくん**。米子の歴史や文化(カルチャー)にくわしい**かるちゃん**といっしょに米子城の魅力や謎に迫ります。今回は三の丸、深浦について学びます。

ミナちゃん：この前図書館であった米子城講演会、すごく面白かったわ。

ジローくん：そうだね。市民ギャラリーの「米子城展」とあわせて、とても勉強になった。絵図を見て、**三の丸**の大きさや様子もよくわかったよ。

かるちゃん：前回、三の丸がすごく広がったという話をしたよね。城内には年貢米や有事に備えての兵糧や武器、武具などの物資が大量に備蓄されていて、もちろん天守やそれぞれの櫓でも保管していたんだけど、何といっても備蓄の拠点は三の丸で、ここには米や物資を納めた蔵がたくさん集まっていたんだ。ほかに、長屋造りの長大な厩や、馬の訓練場である馬場など軍馬に関する施設もあったんだよ。

ミナちゃん：三の丸には軍備に欠かせない重要な施設が集積していたのね。ところで、三の丸が城の表の防御拠点だとすれば、裏側にあたる中海に面した方はどうなっていたのかな。軍港があったと聞いたことがあるけど。

かるちゃん：三の丸から飯山と湊山の間、つまり、現在国道9号線になっているあたりを抜けていくと**深浦**というところに出る。深浦橋という赤い橋が架かっているだろう。そのたもとのあたりに軍港があったんだよ。

ミナちゃん：やまつみスポーツクラブなどのある建物のあたりね。

ジローくん：そうそう。中海側に港らしき施設があるのが絵図にも描かれていた。

かるちゃん：米子城は中海から水を引き込んで内堀を巡らせた構造になっていたの、外海から中海に入ってきて、深浦で小型の船に乗り換えると、そのまま内堀を進んで城下町に入ることができたんだ。そこで、ここに御船手(水軍)を配置し、船頭屋敷、船小屋、番人小屋などの施設や角櫓を設置して、海からの防衛陣地としていたんだよ。

ミナちゃん：あそこなら三の丸から直結しているので、柵形に集合した城兵もすぐに船に乗り込めるというわけね。

かるちゃん：そうだね。深浦郭は二段の石垣を巡らせて、角櫓から常に中海側への監視の目を光らせていたんだけど、この水軍は軍事的なことばかりでなく、船の遭難救助などにも活躍していたんだよ。さらには、造船も行なわれていて、慶長15年(1610)に城主となった加藤貞泰はご座船「**駒手丸**」をここで造り、愛媛県大洲市に転封の際にはこの船で移動したと言われているんだ。当然、造船や修繕にあたる船大工もたくさん必要だったわけで、こうした人たちが集まって住んでいたのが大工町だったんだね。

ジローくん：へえー、それは初耳だな。深浦が貴重な歴史遺産だということがわかったけど、今は当時の面影がないよね。

かるちゃん：そうだよ。遺跡は一度開発されてしまったら消滅してしまって、二度と元には戻らないんだ。だからこそ、今残っているものを大事にして守っていききたいものだね。

ミナちゃん：そう思うと、ますます米子城が大切に思えるわね!地域の宝として後世に伝えていかないとね。

米子城について学ぶほどにその魅力にはまっていくジローくんとミナちゃん。次回もおたのしみに!

(米子市教育委員会 文化課)



深浦



伯耆国米子平図記載の深浦
(宝永6年(1709)年作成)



駒手丸模型
(住吉神社蔵・愛媛県大洲市)